

【レポートタイトル（必須）】

このほかに、講義名、担当教員名、学籍番号、氏名等を記載する必要があります。

ギリシャ哲学、プラトンの著作について

〇〇〇〇（氏名）

1. はじめに

本論では、古代ギリシャの哲学者として知られるプラトンについて、その来歴とともに思想的な内実や著作のテーマを要約した上で、自分なりの考えを述べたい。具体的には、その美についての洞察がのちの芸術論において批判的に継承されていったことに注目し、その意義を述べることとする。

【レポートの問題、目的を提示】
レポートの問題設定（何がテーマなのか）、目的（書き手は何を伝えたいのか）を明確にします。

2. プラトンの来歴とその思想、著作について

プラトンは、紀元前 427 年にアテナイ西方海上のアイギナ島に生まれたと言われている⁽¹⁾。ディオゲネス・ラエルティオスの伝える伝承によると、ソクラテスは 20 歳のときにディオニュソス劇場の前でソクラテスと出会ったという。ソクラテスの死後、彼を主人公とする「対話篇」を書きはじめ、そのなかで「政治と哲学との一体化の可能性」、いわゆる「哲人王」の思想を探っていく⁽²⁾。南イタリア＝シチリアを旅したのち、アテナイに戻ったプラトンは、紀元前 386 年ごろ、アカデメイアの地に哲学の教育研究のための学園を創設する。それ以降もプラトンの著作活動はつづけられ、ソクラテスの精神を継承しつつ、イデア論、魂不死説をはじめ、代表作となる「国家」まで、プラトン独自の思想発展は彼の 40~50 歳代にかけて打ち出されていく。以後、シケリア事件と呼ばれる不穏な情勢をへて、プラトンのアカデメイアでの活動はつづけられていった。

【引用①】文中に引用する場合は、「」でくくる。引用文は改変してはいけません。一字一句そのまま引用。

さて、その著作としては、古代に編纂されたものが中世に筆写され、ルネサンス期の西欧世界において受容されていく。「書簡集」と「ソクラテスの弁明」を別にすれば、残りのすべてが「対話篇」のかたちで執筆されていることが注目される。これは、「たんに表現技法として特異であるにとどまらず、むしろプラトン哲学の根本に直結した「方法」であり、それ自体が彼の思想表明である」⁽³⁾とも言われている。それらの著作を通して、未知なるものについて探究していくための「想起」（アナムネーシス）をもとに、魂の不死、永遠不変の実在をめぐるイデア論などが提唱されていった。

【引用②】長く引用する場合は、このように前後を一行空けて、一段下げて全体引用。

【自分の意見】先行研究や資料を引用した上で、自分の言葉で意見、主張を書きます。

3. プラトンの哲学に対する自分の意見、考え

西洋哲学の源泉のひとつをなすと言われるのが、プラトンの著作である。あらゆるもののイデアを仮設として探究することを通じて、その「ことそのもの」をめがけていく思索のスタイルは、まさに本質的な洞察を行う上での根本原理といえるだろう。晩年の芥川龍之介が「文芸

的な、余りに文芸的な」において「西洋の呼び声」について言及しているように、われわれが西洋と呼ぶものは主に「ギリシア主義」と「ヘブライ主義」という二つの根源のあいだで引き裂かれているが⁽⁴⁾、そのひとつを成しているのがプラトンを代表的な人物の一人とするギリシア哲学であることはまちがいないと考えられる。

また、個人的な関心としては、美についての欲求、憧れについての考察にも興味を惹かれる。それは、プラトンの主宰するアカデメイアで学んでいたアリストテレス以降、芸術の哲学として継承されていく営為の源泉をなしていると言えるだろう。もちろん、プラトン自身は「詩や芸術を「^{ミメシス}真似」なるがゆえに「^{アパテー}欺瞞」を生み出すものとして断罪した」とも言われており、アリストテレスがそのミメシスを「事象の「本質」を「具体的」に「構成」して「呈示」するという、「具体的かつ構成的な本質呈示」という働き」として積極的に捉えていたこととは対称的である⁽⁵⁾。こうした点は、のちに「ニーチェがプラトニズムを転倒しようとした理由」⁽⁶⁾でもありとされており、美や芸術をめぐる議論に対するプラトンの影響は、批判的なかたちではあれ、受け継がれてきたといえるだろう。もとより体系的な記述を好まず、対話という形式を意識的に採用していたプラトンゆえ、こうした継承のあり方はとても似つかわしいようにも思われる。そして、対話と前提とする知のあり方は、独断論的な在り方を斥け、学知を他者や外部へと開かれたものにしていくうえでも示唆に富んでいると言えるだろう。

4. まとめ

以上、本レポートでは、プラトンの来歴とその思想、著作について要約した上で、自分なりの意見、考えをまとめた。21世紀の現在、開かれた学びの在り方を模索する上で、対話をベースとして展開されたプラトンの思索はきわめて示唆するところが多いと思われる。とりわけ、批判的にではあれ継承されていった美をめぐる洞察については、芸術というものを考える上での基礎的な問いかけとしてわれわれ一人ひとりに投げかけられていると考えられる。今後、自分なりに考えを深めていきたい。

【参考文献】

- (1) 内山勝利(責任編集)『哲学の歴史 第一巻 哲学誕生』(中央公論新社、2007年5月)
以下、同段落におけるプラトンの来歴については本書を参照した。
- (2) (1)と同じ。
- (3) (1)と同じ。
- (4) 芥川龍之介「文藝的な、余りに文藝的な」、『改造』(1927年6月)
- (5) 渡邊二郎『芸術の哲学』(筑摩書房、1998年6月)
- (6) ジャン・ラコスト、阿部成樹(訳)『芸術学入門』(白水社、2007年5月)

【まとめ】ここでは新しいことを論じる必要はありません。本論で論述した内容を、文字通りまとめ、読み手に分かりやすく伝える箇所です。要約力が問われます。

【参考文献】これがなければレポートではありません。「参考文献」、「引用文献」、もしくは註記事項とあわせて、「註および文献」と表記します。

書き方の形式は講義ごとに指定されることもあるので、事前によく聞いておきましょう。